

【左大臣兼通】藤原師輔もろすけの一族は、村上帝中宮安子の尽力もあり、朝廷権力を手中にするこ
ととなった。しかし師輔の子である藤原兼通かねみち（堀河殿ほりかはどの）と弟の兼家かねいえ（東三条殿とうさんでうどの）は長年
不和の關係にあり、安子の遺言によって兼通が関白となつてからも対立は続いた。

この向ひ居る侍の言ふやう、「堀河殿あが」東三条殿の官つかさなど取りたてまつらせた
まひしほどのことは、ことわりとこそうけたまはりしか。おのれが祖父親おほちおやは、か
の殿の年ごろの者にてはべりしかば、こまかにうけたまはりしは。この殿たちの
兄弟の御仲、年ごろの官位つかさぐらゐの劣り優りのほどに、御仲悪しくて過ぎさせたまひし
間に、堀河殿御病重くならせたまひて、今はかぎりにておはしまししほどに、東の
方に、先追ふ音さきおのすれば、御前まへにさぶらふ人たち、『誰ぞたれ』など言ふほどに、『東
三条の大將殿まゐらせたまふ』と人の申しければ、殿聞かせたまひて、『年ごろな
からひよからずして過ぎつるに、今はかぎりになりたると聞きて、とぶらひにお
はするにこそは』とて、御前なる苦しきもの取り遣りや、大殿籠りたる所ひきつく
ろひなどして、入れたてまつらむとて、待ちたまふに、『早く過ぎて、内へまゐら
せたまひぬ』と人の申すに、いとあさましく心憂くて、『御前にさぶらふ人々も、
をこがましく思ふらむ。おはしたらば、関白など譲ることなど申さむとこそ思ひ
つるに。かかればこそ、年ごろなからひよからで過ぎつれ。あさましくやすから
ぬことなり』とて、かぎりのさまにて臥したまへる人の、『かき起せ』とのたまへ
ば、人々、あやしと思ふほどに、『車に装束さうぶくせよ。御前みづゑもよほせ』と仰せらるれば、
もののつかせたまへるか、うつし心もなくて仰せらるるか、あやしく見たてま
つるほどに、御冠かぶり召し寄せて、装束などせさせたまひて、内へまゐらせたまひて、
陣ちんのうちは君達きんだちにかかりて、滝口の陣の方より、御前へまゐらせたまひて、昆明
池ちみの障子さうじのもとにさし出でさせたまへるに、昼ひの御座おましに、東三条の大將、御前に
さぶらひたまふほどなりけり。この大將殿は、堀河殿すでにうせさせたまひぬと

聞かせたまひて、内に関白のこと申さむと思ひたまひて、この殿の門を通りて、まゐりて申したてまつるほどに、堀河殿の目をつづらかにさし出でたまへるに、帝も大将も、いとあさましく思し召す。大将はうち見るままに、立ちて鬼の間の方におはしぬ。関白殿御前につい居たまひて、御気色いと悪しくて、『最後の除目⁴行ひにまゐりてはべりつるなり』とて、蔵人頭召して、関白には頼忠^{よりただ}のおとど、東三条殿の大将を取りて、小一条^{こいちでう}の済時の中納言を大将になし聞こゆる宣旨^{なりとき}下して、東三条殿をば治部卿^{ちぶのきやう}になし聞こえて、出でさせたまひて、ほどなくうせさせたまひしぞかし」

〔注〕○祖父親——祖父。○御前にさぶらふ人々——ここでは、自分の前に控えている人々。
○陣のうち——近衛の陣の内側。○昆明池の障子——清涼殿の東庇にある衝立^{ついたて}。
○昼の御座——清涼殿中央の天皇の御座所。○つづらか——目を大きく見開く様子。
○鬼の間——清涼殿南西の部屋。○頼忠——実頼の子で、兼通・兼家には従兄弟。
○済時——師尹の子で、同じく従兄弟。○治部卿——治部省の長官。四位相当。

【問】

① 点線部1「かの殿の年ごろの者」とはどういう者か（指示語の内容を示して）。

② 点線部2を品詞分解して現代語訳せよ。

とぶらひにおはするにこそは

③ 点線部3「あさましくやすからぬことなり」という気持ちに兼通がなったのはなぜか。

④ 点線部4「最後の除目」の内容はどのようなものか（簡潔に）。

【語彙・文法】（○＝語彙・●＝文法・☆＝常識。ただし重なるところも）

○ことわり ○年ごろ ○今はかぎり ○さぶらふ（謙譲語） ●にておはしまししほどに
☆先追ふ ○とぶらひ ●にこそ ●御前なる ○取り遣る ○大殿籠る ○ひきつくるふ
○早く ○内 ○あさまし ○心憂し ○をこがまし ●おはしたらば ○やすからず
●臥したまへる人の ☆御前（前駆） ☆もののつかせたまへるか ○うつし心 ○あやし
○君達 ○つい居る ☆除目

【文法基礎練】断定の助動詞

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の型
なり							
たり							
（下接語）	―ば	―けり ―して	―。	―とき	―ども	―！	

意味 （なり）①断定（〜だ・である） ② （ ）

（たり）①断定

接続 （なり）体言＋活用語の「 」形

↑伝聞推定の「なり」は活用語の「 」形（ラ変は「 」形）接続

……「男も**する**日記といふものを、女もしてみんと**するなり**」（土佐日記）

（たり）体言（※漢文調）

↑完了の「たり」は活用語の「 」形接続

【現代語訳】

この対面して座っている侍が言うには、「兼通殿が兼家殿の官職を取り上げ申し上げなさったときのいきさつは、道理のことだと（私は）お聞きしていました。私の祖父は、あの殿（兼通殿）に長年仕えていた者でございましたので、こまかにお聞きしましたよ。この殿たち（兼通・兼家）のご兄弟の仲は、長年の官位の勝ったり負けたりうちに、仲が悪くなつて年月を過ごされていたときに、兼通殿がご病気が重くおなりになって、もはやこれまでという状態でいらつしやったときに、東の方で、（貴人の車の）先払いをする声が聞こえたので、

(兼通殿の) 御前にお仕えしている人たちが『どなたの車か』などと言っていると、『兼家の
 大将殿が参上なさいます』と人が申したので、兼通殿はお聞きになって、『長年仲が良くな
 くて過ぎてきたが、(弟は) わしがもう今はの際だと聞いて、見舞いにいらっしゃったのだな』
 とおっしゃって、お身の回りにある見苦しいものを片付け、お休みになっている部屋を整え
 などして、(兼家殿を) 入れ申し上げようとしてお待ちになっていたが、『(兼家殿の車は兼通
 様の御邸を) もう通り過ぎて、内裏に参ってしまった』と人が申すので、(兼通殿は)
 ひどく驚き呆れ、みじめな気持ちになって、『(わしの) 御前に仕えているそなたらも、(兼家
 を迎えようとしたわしを) 愚かだと思っているであろう。(兼家が) 来られたならば、関白な
 ど譲ってあげようと申そうと思っていたのに。このようだから、長年仲が良くなって過ご
 してきたのだ。(兄との最後の対面にも来ないとは) 呆れた、不愉快なことだ』とおっしゃって、
 臨終の床についていらっしゃる人(兼通) が、『わしを抱き起こせ』とおっしゃるので、(お
 仕える) 人々は変だと思っていると、『車の支度をせよ。前駆(貴人の車の前を馬で先導す
 る者)を招集せよ』とおっしゃるので、殿は物の怪がお憑きになったのか、正気を失ってお
 っしゃっているのかと、(お仕える人々が) 奇妙に思い申し上げているうちに、御冠をご用
 意させて、参内のための装束もお身につけになり、内裏に参上なさって、(乗り物が乗り入
 れられない) 近衛の陣から内側はご子息の肩を借りて、滝口の陣のほうから、帝の御前(清涼
 殿) に参上なさって、昆明池の障子のもとに出ていかれたところ、昼の御座のところで、
 兼家の大将が帝の御前に伺候なさっているところであった。兼家の大将は、兼通の関白殿が
 すてにお亡くなりになったとお聞きになって、帝に関白のことを奏請しようと思ひなさって、
 兼通殿の邸の門を素通りして参内して帝にお話し申し上げているところに、(死んだはずの)
 兼通殿が目まぐるさざらさざらして出てこられたので、帝も兼家の大将も、ひどく驚いたことだ
 お思ひになる。兼家の大将は(兄を) ぱっと見るとすぐに、立ちあがって鬼の間のほうへ逃
 げられた。兼通の関白殿は帝の御前に膝をついて坐り、お加減はひどく悪いものの、『最後の
 除目を執行に参内しましたのです』といって、蔵人頭をお呼びになり、次の関白には頼忠の
 大臣、兼家殿からは近衛大将の官職を取り上げて、小一条の済時の中納言を大将にして差し
 上げるといふ宣旨を下して、兼家殿は治部卿に任命申し上げて、宮中を退出なさり、ほとん
 ど亡くなったのですよ』

